

英国における陸軍看護制度と 第二次世界大戦における実際

——戦争と看護の歴史をみる視点に焦点をあてて——

川原由佳里

日本赤十字看護大学

受付：平成30年10月31日／受理：平成31年4月24日

要旨：本稿では、戦争と看護の歴史をとらえる視点の拡充に向け、英国の陸軍看護制度と第二次世界大戦中の実際を明らかにすることを目的とした。結果、英国では戦傷病者の看護は英国政府の責任であるとする考えに基づき、少数精鋭のエリートである軍看護婦の養成が開始された。その後、戦争での看護需要の増加に際して、英国赤十字社等の民間のボランティア救護班が導入され、外地では植民地の労働力が利用された。国内では空襲被害に対応すべく民間病院の有資格看護婦が動員され、代わりに看護婦生徒が病院の労働を担った。軍看護婦の階級と地位は男性将校と同じ水準にまで高められたが、看護教育や実践に階級や規律の厳しさがもちこまれるなどの影響があった。

キーワード：第二次世界大戦、陸軍看護制度、アレクサンドラ女王帝国軍看護サービス、英国赤十字社、ボランティア救護班

I. 研究の背景・目的

19世紀、看護は長い歴史をもつ宗教を背景とした慈善の実践から、一つの職業として新たな道を歩み始めた。そのきっかけの一つが、Nightingaleのクリミア戦争での活躍であった。その活躍については今も飽くことなく言及されるが、それに比べてその後の英国陸軍における看護の発展や、戦争が看護に及ぼした影響は語られることは少ない¹⁾。特に関係各国において多くの女性を動員し、多大なる労苦をもたらした、しかも看護専門職の発展を妨げたと総括される第二次世界大戦については、その実態を知る手がかりは多くはない。

戦争が看護に及ぼす影響はさまざまである。看護の教育訓練、資格認定、職能団体、職業規制などへの影響とともに、近年では軍隊の階級や規律の厳しさが看護教育や実践の伝統として引き継がれることの問題、看護婦が戦争へ動員されることによる民間医療への影響へと視野が広がりつつあ

る²⁾。日本でもこの分野に関して研究が行われてきたが³⁾、多くは自国のしかも人道的活動とその結末という枠を出ないものが多い。

国によって社会の仕組み、国民性、価値観、歴史が異なるため制度の比較は簡単ではないが、自国以外の軍看護の制度の成り立ちや発展、戦争など様々な要因のもとでの制度の実際を明らかにすることは、戦争と看護のテーマを探究するうえで視野を拓けるのにつながると考えた。以上から本稿は、戦争と看護の歴史をとらえる視点の拡充に向け、英国の陸軍看護制度と第二次世界大戦中の実際を明らかにすることを目的とした。

英国の陸軍看護制度は複雑な構成をしている。歴史的には大きく分けて、軍直轄の組織であったアレクサンドラ女王帝国軍看護サービス⁴⁾ (Queen Alexandra's Imperial Military Nursing Service; 以下QAとする)と、民間団体である英国赤十字社等のボランティア看護組織とに分けられる。第二次世界大戦における英国の陸軍看護については、公

式報告書として1955年に発刊されたCrewのThe Army Medical Services⁵⁾が存在する。QAについてはHay (1953)⁶⁾、Piggott (1990)⁷⁾ならびに2002年に発行されたQARANCの100周年記念誌⁸⁾があるが、いずれも概要が示されているのみである。

II. 研究方法

第二次世界大戦における陸軍衛生に関するCrew (1955) による公式報告書を中心に、軍直轄の看護組織についてはHay (1953)、Piggott (1990)、QA100周年記念誌 (2002) を、また民間ボランティア団体の看護組織についてはHallett (2016)⁹⁾の著作を参考にした。また英国公文書館 (The National Archives)、大英図書館 (The British Library)、帝国戦争博物館 (Imperial War Museum)、ウェルカム医学史図書館 (The Wellcome Library) 所蔵の関係資料、Royal College of NursingのHistorical Nursing Journalの雑誌記事、関係団体のホームページ、関連書籍を対象とした。これらの史資料は戦時・平時における看護婦の組織、動員、教育、任務、待遇などの制度とその運用による影響に焦点をあてて分析した。

以下では、第二次世界大戦中の陸軍看護制度のもととなったクリミア戦争以降からの陸軍看護組織の成り立ちをSummers (2000)¹⁰⁾や黒川 (2001, 2003)¹¹⁾を参考に記述し、次いで第二次世界大戦での制度とその実態について記述し、考察することにした。なお看護婦の呼称については、日本看護歴史学会の見解に基づき、その年代のものを使用する。史料は所蔵施設の利用と掲載に関する規定に従い利用した。

III. 結果

1. 第二次世界大戦まで

1) 陸軍病院における女性による看護の始まり

Crewによると18世紀まで傷病兵のための女性による看護組織は存在せず、夫に付き添い従軍してきた妻や女性たちが看護を担っていた。19世紀初頭には、英国議会がロンドンの軍病院のために女性を雇用したという記録が残されている。これらは駐屯部隊の妻たちによるもので、当然なが

ら正規の訓練を受けたものではなく、看護の水準は高くなかった。しかしこの時代では普通のことだった¹²⁾。

1853-56年のクリミア戦争以降、Nightingaleは陸軍病院において女性看護婦を採用することを想定した改革を進めた。1857-8年に軍病院看護婦規則が創案され、1961年より看護婦が採用された。最初の看護婦総取締 (Superintendent-in-Chief) Jane S. Stewartはクリミア戦争ではシスターとして活動した看護婦で¹³⁾、聖トマス病院で正規の看護教育を受けた卒業生6名が同行し、任務にあたった。1863年にはネトリに「軍看護の揺りかご」と呼ばれる王立ヴィクトリア病院が完成した。そのすぐ後に王立ハーバート病院、ケンブリッジ侯爵病院が建設された。王立ヴィクトリア病院とハーバート病院にそれぞれ看護婦取締 (Superintendent) 1名とシスター (Sister) 6-10名からなる看護要員が配置された¹⁴⁾。

1880年には英国赤十字社の前身である英国戦傷病者協会の女性委員会によって資金が提供され、王立ヴィクトリア病院にて軍看護婦の養成が開始された¹⁵⁾。最初の看護婦取締はJane C. Deebleで、教育課程は2ないし3年で、生徒は1か月の試用期間ののち住み込みで1年、その後2年間は病院にて勤務した。候補生には将校の妻や未亡人も含まれており、男性補助者 (Ward Orderlies) の指導監督を行うことを想定し、一定以上の階級の出身者であることが重要な条件とされていた。訓練を受けた看護婦は各地の軍病院へ送られ、軍看護の基礎を築いた。

1881年、公式に陸軍看護サービス (ANS) が発足した。看護婦取締はMiss Deebleで、1884年には陸軍看護婦規則が制定され、すべての陸軍看護婦があらかじめ民間病院で訓練を受けるべきこと、100床以上の陸軍病院で看護要員を採用すべきこと、看護婦の任務については「患者の看護の他、薬、食事などを与え、男性の看護補助者に対する責任をもつ」ことが定められた。制服はグレーのドレス、麦わら帽子であった。1886年にはすべての陸軍病院で看護婦が採用され、1887年陸軍看護サービスはクリスチャン王女陸軍看護

サービス (Princess Cristian's Army Nursing Service) と改称された。

英国ではこの間、帝国による植民地支配のため、ズールー戦争(1879-80年)やエジプト軍事介入(1881-2年)などが次々と勃発し、陸軍病院に採用された英軍看護婦の海外派遣が行われ、軍隊における看護力強化の必要性が高まった。その後のボーア戦争(1899-1902年)における看護は、これまでにない大規模なものとなり、最終的には1,400名以上の看護婦が採用されたが、戦闘そのものより医療体制の不備で死亡する兵士の方が圧倒的に多く¹⁶⁾、あらためてANSを見直すきっかけとなった¹⁷⁾。

なお1899年10月には英国赤十字中央委員会が軍の公式承認を得て、これに属する各組織も救護活動に参加したが、十分に統制がとれたものとはならなかった¹⁸⁾。

2) 陸軍看護サービスの拡張とボランティア救護組織の発足

1902年3月には看護婦の権威を高めるため、クリスチャン女王陸軍看護サービスはアレクサンドラ女王¹⁹⁾帝国陸軍看護サービス (Queen Alexandra's Imperial Military Nursing Service; QA) もしくはQAIMNS) に名称変更し、QAは王立陸軍医療部隊 (Royal Army Medical Corps; RAMC) のもとに位置づけられた。

QAの構成メンバーは総監督 (Matron-in-Chief) 1名、主監督 (Principal Matron) 2名²⁰⁾の他、マトロン (Matron)、シスター (Sister)、スタッフ看護婦 (Staff nurses) であり、総勢300名からなる組織とした。またQAの階級はRAMC将校の次に相当する准士官とし、陸軍病院における医療と衛生、傷病者の看護に関する事項に権限をもつこと、男性補助者を指導監督することが服務規定に明記された。グレーの制服に赤いケープ、ダンネブ十字とリボンがあしらわれた記章が制定された。モットーは「白十字のもとに (Sub cruce candida)」である²¹⁾。

1907-9年にはQAは2つの拡張を行った。一つは戦争での経験を有する看護婦を登録しておく

QA予備役 (QA Reserve; QA/R) の設置であり、もう一つは国内にある23の国民義勇軍の病院にて3年の教育を受けた看護要員を、同じく予備役として登録しておく国民義勇軍看護サービス (Territorial force nursing service; TFNS) の設置である。後者は第一次世界大戦に8千名の予備役を動員、1921年には国防義勇軍看護サービス (Territorial Army Nursing Service; TANS) に改称された²²⁾。

なお国防義勇軍 (Territorial force) は、国土防衛の任務にあたる部隊であり、国外での任務は強要されないことになっていた。しかし第一次世界大戦以降、正規軍の任務を請け負うようになり、戦争が終わる頃にはほとんど同じ任務にあっていた。

同1909年には戦時に衛生支援を行う民間ボランティア組織をつくることを目的に、「イギリスおよびウェールズにおけるボランティア救助部隊計画」が発表され、英国赤十字社²³⁾と聖ヨハネ救急車部隊 (St John's Ambulance Brigade)、聖アンドリュー救急車協会 (St Andrew's Ambulance Association) が、ボランティア救護班 (Voluntary Aid Detachments; VAD) を設立した²⁴⁾。なお黒川が述べるように、英国では政府がジュネーブ条約に加入する以前から、複数のボランティア救護組織が存立し、赤十字の一国一社という原則が実質上成立しなかった。表向きは英国赤十字社が代表するかたちで、複数のボランティア救護団体が戦時の衛生支援にかかわっていた。

VADは男性と女性の班に分けられ、さらに看護要員とそれ以外の要員に分けられた。女性のVAD看護要員は、救急・包帯法、病室調理法、衛生法、家庭看護法の講習を受け、実技試験に合格し、認定証を授与されたものとし²⁵⁾、認定された後、知識や技術を定着させるため、地方の病院で約6か月の見習い訓練を受けることになっていた。看護以外の要員には、薬剤師、放射線技師、病院の調理師、マッサージ師、配達、検査助手などがいた。VADは1910年末には約8,000人、1912年初頭には2万6,000人、第一次世界大戦の開戦時には5万人が登録、1918年には3,382個班を数えた。

3) 初の総力戦としての第一次世界大戦

第一次世界大戦（1914–18年）は、初の世界戦争であり、多くの国を巻き込み、国民を総動員したの総力戦が行われた。兵器の開発により、市民に被害が及ぶとともに、傷病者も重症化し、特に看護において人手不足が深刻となった。1914年の開戦時のQAは272名であったが、QA、TANS予備役の動員が図られ、同年末には正規と予備役をあわせて2,223名となり、さらに既婚者の採用を認めるなどして、終戦時には総勢10,404名を動員した。

VADには遠方への派遣が可能なMobileと自宅近くでの任務を希望するImmobileの2つの区分があった。戦時の需要を満たすため、必要な講習を受けなくても3か月の病院勤務で試験が受けられるなどの変更が行われた。さらに1915年、戦時局はVAD看護要員を、国内外の軍病院で有償にて雇用することにした。VAD看護要員は軍病院の規則を守り、将校及び婦長の直接管理下において、有資格看護婦の指示のもとで任務にあたるのが定められた²⁶⁾。

軍病院ではVADはまず雑務などの単純で安全な仕事が与えられ、それができるようになると少しずつ患者への直接ケアを提供することが許された。規律が厳しく、雑務ばかりで直接ケアに携われないなどの不満があった²⁷⁾が、軍病院での勤務経験があれば、任務を終えた後、民間病院の見習いとして同様の仕事に就くことができ、戦後しばらくは民間病院で需要が高かった。VADは総勢約74,000名が動員された。うち軍病院に勤務した看護婦（有給）は約12,000名、関連病院で勤務したボランティアは約60,000名であった²⁸⁾。

第一次世界大戦はNightingaleや赤十字の創始者であるDunantの影響力が失われつつある時代背景のもとで、少数の大切に育てられたエリート看護婦のもとに、多数の愛国心をもった女性が動員され、困難を抱えつつ協働した。その一方で、本来の赤十字の博愛に愛国主義がないまぜにされ、ボランティア救護団体の軍隊化（Militarization）が進んだとHutchinsonは記述している²⁹⁾。

4) 戦間期における強化

戦間期には、陸軍看護サービスのさらなる強化が図られた。1926年からQAに階級が認められ、総監督（Matron-in-Chief）は大佐、主監督（Principal Matron）は中佐、マトロンは少佐、シスターとスタッフ看護婦は中尉の階級が認められたが、これは給与や待遇などもすべて通常の軍隊なみに保証されるコミッションではなく、その階級に相当するという意味のノンコミッションの階級であった。また戦争での経験を有するQAメンバーをQA/Rとして永年登録し、彼女たちの登録時の年齢の上限を50歳にし、登録抹消の上限を60歳とした。

TANSについても登録時の年齢を23歳から40歳にまで延長し、3,500名の登録をめざすことになった。委員会のメンバーには、各地方の国防義勇軍病院の主監督23名が含まれ、彼女らはTANSの応募先でもあった³⁰⁾。1937年には主監督を32名に増員して、募集を強化した。TANSは1921年には3,124名であったのが、1938年には4,768名に増加した。

民間病院で勤務する正規の教育を受けた看護婦500名を年間2ポンドの登録料で、民間病院看護婦予備役（Civil Nurse Reserve; CNR）として確保することにした。

VADについては、1918年3月の規定により、軍病院において2年程度の勤務経験を有するVADは、推薦により准看護婦（Assistant Nurse）へと昇格する制度が設けられた。また3年間に1度、1週間の病棟業務に関する訓練を受けることを求められた。

1926年、かねてから統合が模索されていたアレクサンドラ女王陸軍看護サービス（インド）（QAIMNS (India) with Imperial Service）との統合が実現した。この統合により、QAの任務に、インドの部隊を看護するインド陸軍看護サービス（the Indian Military Nursing Service; IMNS）が加わった³¹⁾。

なお英国では1919年の看護婦登録法（Nursing Registration Act）により、3年の教育を受けた看護婦の任意での登録が始まり、順次、既得権者へ

の配慮が行われ、1943年には新卒看護婦のみを登録することになった。またVAD等の2年程度の勤務経験を有する看護婦は1941年に准看護婦(Assistant Nurse)と定義され、1943年の看護法によって合法化された。

2. 第二次世界大戦

1939年9月、ドイツ軍のポーランド侵攻により第二次世界大戦が始まった。1940年にはイタリアが英国やアメリカに対して宣戦布告、戦場はバルカンやアフリカにも広がった。またアジアでは日本が1941年12月に太平洋戦争を開始し、ヨーロッパとアジア、太平洋を主戦場とする世界規模の大戦争となった。

英国陸軍看護サービスは英国をはじめヨーロッパ、中東、インド、セイロン、東アフリカ、西アフリカ、モーリシャス、ビルマ、マレイ、シンガポール、東オランダ領インド、香港などで必要とされた。英国本土も、ヨーロッパ戦線と近いこともあり、市街地や軍港などの要所が空爆による被害をうけた。国内での救護も重要な課題であった。

この戦争では、英国保健省が全体の医療計画を立てた。陸軍には教育を受けた看護婦約5,000名の配置が必要であり、国内の空襲被害のための救護所(first-aid)と救急病院(emergency hospital)には教育を受けた看護婦34,000名から67,000名の配置が必要と見積もられた。国内には教育を受けた看護婦が60,000名いた³²⁾。

陸海空軍のそれぞれに医療サービスを提供する部隊があり、陸軍に対しては王立陸軍医療部隊(RAMC)が医療サービスを提供していた。このもとにさまざまな陸軍看護サービスが位置づけられ、その代表的な組織がQA, QA/R, TANSであった。そこに民間の組織である英国赤十字社や聖ヨハネ修道会のVAD看護要員、民間病院の看護婦予備役CNRが入り混じって活動した。

以下ではこの戦争にかかわった看護婦組織と、その動員、教育、任務への配属、地位と報酬などの制度とその運営によってもたらされた影響を記述する。

1) 看護要員の動員と組織改編

(1) 有資格看護婦の動員

1939年時点での陸軍看護サービスの総監督はMiss Catharine M. Royで、1940年にMiss Katharine H. Jonesが就任して、終戦までのその任務について。1939年の開戦時、動員可能なQAは624名であった。開戦後、総監督はすぐさまQA/R, TANSそして民間病院看護婦予備役(CNR)の動員を指示した。最終的には1945年の終戦までに10,419名を動員した³³⁾。

QAはすでに資格を取得しているか、少なくとも州の登録看護婦の身分で実践をしていること、成熟した人格及び行動特性、高い身体的・精神的能力を有し、英国では英国籍で35歳未満の独身または未亡人、養育を必要とする子がいないことであった。採用にあたっては医師による健康状態の確認も行われた。6か月の試用期間があり、3か月を過ぎた時点でレポートを提出、その3か月後に採用の可否が決定した。配属されるのは100床以上の病院、海外勤務においては3から5年を限度とするという条件があった。QA/Rは戦時の看護経験を有するQAで、戦間期に登録可能な年齢は50歳まで、登録抹消となる年齢は60歳に変更されていた^{34,35)}。

TANSは国防義勇軍病院に所属していた予備役看護婦であり、登録要件は認可された病院で3年以上の教育を終えているものであった。戦間期に登録可能な年齢が40歳までになった。1940年にはQAに吸収されたが、制服などはQAとは異なるものを着用した。

CNRは、民間病院で勤務していた予備役の有資格看護婦であり、先に述べたように空襲被害が想定される救護所と救急病院で勤務するか、補助要員となることを期待された³⁶⁾。保健省は総勢20,000名のCNRが必要とし、そのうち10,000名(3年の教育を受けた看護婦7,000名と2年程度の教育を受けた准看護婦3,000名)は、民間病院の看護婦を2分の1削減することで準備し、残りの10,000名は教育を受けていないボランティアの看護補助者(Nursing Auxiliaries; 50時間の訓練)で構成することにして、民間病院からいなくなった

看護婦の穴埋めを看護婦生徒で行う計画を立てた。1942年に保健省は見積もりを12,000名へと下方修正したが、それでも民間における深刻な看護婦不足をもたらした³⁷⁾。

QA, QA/R, TANSの動員について、Stern (2000)は教育を終えたらふつう就職するからとあまり考えずに入隊した、陸軍の階級や制服にあこがれた、民間病院に教育を受けていない看護婦が集まり、大変な状況になっているので入隊した、などの理由をあげている。またそれまで反戦運動に携わっていたために、入隊することに良心が咎められた看護婦もいたと述べている³⁸⁾。一方、Tyrer (2009)はみな愛国心と冒険心に富み、強制されることなくサインしたと述べている³⁹⁾。

(2) ボランティア組織の改編

VADの看護要員は、軍隊の衛生活動を民間の立場からさまざまに支援していた。この戦争で、英国赤十字社により14,155名、聖ヨハネ修道院により1,695名、聖アンドリュー救急車協会により21名が動員された⁴⁰⁾。

VAD看護要員は、定められた講習を受け、試験に合格した後、病院での実習を課せられた。軍病院で2年程度の勤務をすれば准看護婦に昇格する機会もあったので、一定の教育を受けた人材として認められていた。しかし増大した看護需要を満たすため、開戦の2日前、救急法と看護法の講習を受けているものは実習を不要とし、既婚者も採用することにした。

VAD看護要員は、QAを前線に出すにあたって、それまでQAが担っていた傷病者後送所や基幹病院での任務に就かせることになった。看護以外のVAD要員のうちmobileは、RAMC男性補助者を前線に出すにあたって、それまで男性補助者が担っていた看護補助、薬剤師、配達、事務、病院食調理、調理などの任務に就かせることになった。そしてimmobileのVAD要員は、空襲被害などで緊急召集し、有給で職務に就かせることになった⁴¹⁾。

VADは国家総動員を目的とした国の組織変革により、さらなる苦境に立たされた。1941年には国民奉仕法が可決され、これに基づき1942年

には戦時局がVADを補助国防義勇軍サービス (Auxiliary Territorial Service: ATS) に合併させる案を示した。ATSとは軍の後方支援のために未婚の20歳から30歳の女性 (後には既婚者を含めて) 動員、組織するもの⁴²⁾で、VADのATSへの合併は、国際赤十字委員会のもとに活動する英国赤十字社、聖ヨハネ修道会にとっては、政治的中立性にかかわる問題であった。

英国赤十字社、聖ヨハネ修道会の強い反発により、国防義勇軍協会を含む篤志団体の代表委員会がVAD委員会を代替するが、みかけ上は各団体がそれぞれの名称のもとに独自のアイデンティティを保持するものとした。しかしながらこれによりVAD看護要員は陸軍委員会により採用登録されるものとなり、ATSと同等の地位と階級とが認められる反面、ATSと同様に陸軍の規則が適用され、かつその指揮下に入ることとなり、民間ボランティアとしての立場はよりいっそう曖昧なものとなった。

なおATSの任務は事務、調理、電話、ウェイトレス等とかなり幅広く、看護補助業務をすることもあった。その場合は国内外の軍病院、国内の赤十字予備病院をはじめ、軍港や駅の患者発着所での任務にあたった。終戦までに19万人以上がATSの任務に従事した。

(3) 民間医療への影響

教育を受けた看護婦の動員により、国内の保健医療体制は崩壊寸前となった。空爆を避けて、多くの一般患者が郊外の病院へと疎開させられ、郊外の病院が多くの患者を抱えるとともに、地区看護婦の仕事が過重になった。民間病院からシスターや看護婦が数多く退職し、教育をほとんど受けていない無資格の看護婦が大量に流入した。民間病院では2、3日しか訓練をうけていない人でも看護婦として仕事をし、看護の質が低下した。不便な場所にある、給与が安いなどにより、看護婦が勤めたがらない結核病院や精神病院ではさらに問題は深刻だった。

1941年には、保健省は民間病院看護婦予備役 (CNR) の配置を救急病院に限定することをやめ、希望するものは民間病院に戻し、有資格看護婦の

給与を民間病院、結核病院、精神病院も含め、CNRと同じ水準にするための資金援助を行った。しかし給与水準をあげても、40%にも上る物価高騰により、効果は目に見えては表れなかった。Nightingaleのような看護婦をヒロインとした映画を作成し、厳しい規律を緩めて、採用年齢も18歳から40歳までと拡張し、既婚女性を含めて募集した。看護婦生徒をできるだけ長く病院で使用するため、General Nurses Councilは教育期間を3年から4年に変更する案を提出したことさえあった⁴³⁾。

1943年の看護法により准看護婦が合法化された。同時にほとんど教育を受けていないクリスチャンサイエンスの女性を看護婦と認めたため、有資格看護婦からは看護婦の地位を貶め、国民の命を危機に晒しているとの反論がわき起こった⁴⁴⁾。同年、保健省は民間病院の人手不足を緩和するために、病院のマトロン、アシスタントマトロン、シニアシスター、助産婦、保健婦、地区看護婦、サナトリウム看護婦、小児看護婦、精神看護婦の陸軍看護サービスへの入隊を禁じた。これによりQAになれるのは新卒看護婦のみとなり、現場では新卒の看護婦が経験豊富な男性補助員に指示しなければならないなどの困難な事態が生じた。

2) 教育

戦前における英国の看護教育は、現在と比べて厳しく、軍病院や都心の大病院ではさらにその傾向は強かった。ネトリーから始まった中流以上の階級の女性に対して行われた軍看護婦の教育は、エリート志向、階級重視で、多様性を認めず、奉仕、義務、規律、権威への服従などを厳しく叩き込むものだった。

看護婦生徒はジュニアナースと呼ばれ、病院のマトロンやシニアシスターは看護婦生徒にとってのみならず、患者にとっても権威ある存在であった。その指導のもと生徒は2週間に日勤で67時間、夜勤で72時間の勤務をし、そして勤務時間外である午後2時から4時に講義を受けた。初年次には看護というよりむしろ病院の雑用を引き受

け、勤務中は座ることが許されなかった。食糧に乏しく、常に空腹をかかえ、衣類も十分には支給されなかった⁴⁵⁾。初心者には分かりにくい厄介なルールがいくつもあった。外出も月に1回であり、門限も厳しかった。1943年の退学者の割合はボランティア病院で33%、市立病院で41-47%であった。病院でも空襲被害があり、夜勤者が爆撃により死亡した、自らの危険を顧みず、牽引をしているために、窓ガラスの割れた病室から廊下へと避難できない患者の傍にいて励ました、患者の死後の処置をしたというエピソードがある。

戦前から看護婦は人気がなく、志望する女性は少なかった。実習という名の生徒の労働は、動員された一般女子の労働に比べて、長時間にわたっていたが明らかに給与が少なく、生徒からは「人間として扱ってほしい」などの意見が寄せられた。保健省では、General Nurses Councilの基準を満たす教育課程では看護需要が満たせないとして、多くの女性が養成所を志望できるように教育水準を下げざるをえなかった。

軍隊の規律や慣習に関する教育は、VADやATSの女性にも行われた。たとえばVAD看護要員のマニュアルには、軍隊においては一般の場合のように医師と看護婦が友好的な関係ではないこと、医師への報告はシスターの専権事項であり、VADはシスターより先に医師に報告してはならないと記載されていた⁴⁶⁾。ATSのうち看護補助の任務を与えられた者も、軍隊の敬礼や階級に関する事項などについて教育を受けた⁴⁷⁾。

軍隊の規律や厳しさは、新卒で軍病院に配属されたものにとっては馴染みやすかったが、民間病院出身の看護婦にとっては異文化体験であった。軍病院では、看護婦は疑問をもたずに命令に従わなければならない、無用と思われる手続きばかりで看護そのものは遅れているように感じられた。患者は民間病院よりも若くて元気であったが、全員が病棟付きの下士官に服従し、白シャツに青いサージのズボンとジャケット、赤いネクタイを着用しており、ロッカー内の衣類や小物は、それぞれ置き場所や向きまでが決められた通りになっていた⁴⁸⁾。

なお QA については将来有望なメンバーを高等教育機関等で研修させる制度もあった。1927年に QA 委員会がメンバー 1 名に奨学金を支給し、ベッドフォードカレッジの国際看護管理者コースに派遣、1 年間の研修を受けさせたのを皮切りに、管理の他、助産、手術看護、精神医学など関連する研修を、病院や高等教育機関で受けさせ、それぞれ専門的な役割を担わせた⁴⁹⁾。

3) 前線から後方までの救護組織と勤務

表 1 は王立陸軍医療部隊 (RAMC)⁵⁰⁾ の救護組織を示したものである。前線から後方まで、傷病者の救護経路 (chain of evacuation) に沿って、収容地域、避難地域、分配地域の 3 つを定め、それぞれに必要な施設と人員が配置された。

傷病者が出た場合、最前線から 200~300 ヤードの地点の小屋や掘った穴などの隊付救急所に緊急退避させ、救急鞆にある材料で応急処置を行った。そして野戦救急隊により 1 マイル後方の前線包帯所に移送され、医師により①すぐさま治療が必要なショック状態、②輸送可能であるが治療が必要な状態、③輸送が可能な状態の 3 区分にトリアージされ、救急車輸送隊によって 2 から数マイル離れた傷病者後送所に送られた。傷病者後送所は接収されたホテルや学校、別荘であり、傷病者はそこで必要な緊急手術や輸血、輸液を受け、車や列車、船、飛行機などで基幹病院に送られ、さらに必要であれば海路もしくは空路で本国に帰還した。このプロセスの途上で回復したものは、前

線の任務にあたらせることになっていた⁵¹⁾。

傷病者の避難経路にあたる施設にはそれぞれ外科医や麻酔医、衛生補助員が配置された。前線に近づくほど危険になり、強いストレスがかかるため、女性である看護要員は原則として、傷病者後送所 (CCS) までで勤務すること、それより前線には配置されないことになっていたが、第二次世界大戦からは前線に配置する方針 (Frontline Policy) が採られ、QA は前線の中央包帯所 (MDS)、野戦手術ユニットなどにも配置された⁵²⁾。また VAD 看護要員は主として陸軍病院に配置されることになっていたが、1943 年からは赤十字社の有資格看護婦とともに傷病者後送所にも配置されるようになった。後方ではすべての施設に VAD 看護要員が配置され、赤十字の有資格看護婦とともに、駅舎や港で移送中の傷病兵に食事、水、慰安、救護を提供するサービスを行った。

戦地では、特別な作戦が行われるときには策定された計画に基づいて救護所が開設された。参謀 (General Staff) が伝えた死傷者予測をもとに、RAMC 医療スタッフと高級副官 (Adjutant) が死者、担送、護送、独歩患者の想定割合を計算し、兵站担当将校 (Quarter Master) から輸送手段を得るとともに、RAMC 副長官 (Assistant-Director of Medical Services; ADMS) は死傷者の避難計画、開設予定施設への資源配分・集積計画をたて、高級副官の承認を得て、実行した。

戦地の救護部隊は、通常の部隊と違って、テントや備蓄材料などを多数携帯し、その荷詰めや開

表 1 救護経路

収容地域 Collecting Zone
隊付救護所 (Regimental Aid Post; RAP's)
前線包帯所 (Advanced Dressing Station; ADS's)
独歩患者収容所 (Walking Wounded Collecting Post; WWCP)
中央包帯所 (Main Dressing Station; MDS)
野戦救急隊 (Field Ambulance)
救急車輸送隊
避難地域 Evacuating Zone
傷病者後送所 Casualty Clearing Station (CCS)
救急自動車による護送、病院列車、病院荷船、病院飛行機
分配地域 Distributing Zone
陸軍病院、回復期患者の療養所、病院船、病院輸送、家庭の病院

封に時間をとられるため機動性が悪く、救護所の開設、閉鎖のタイミングや場所の選定、過不足なく配置することが作戦上、重要であった。部隊の行動や任務地は秘匿事項であり、一切口外してはならないことになっていた。出発日も急な予定変更によって早まったりもした⁵³⁾。

部隊は教育訓練の場としても機能しながら、戦況に応じて場所を移動して救護所や病院を開設した。部隊には医師、薬剤師、検査技師、救急法を学んだ病棟付の男性助手などがいた。看護婦は民間病院から新採用者が入ってきたり、以前に動員され一旦任務を離れたQAが戻ってきたりすることによる入れ替わりがあった⁵⁴⁾。適宜、戦時休暇 (War Leave)、病気休暇 (Sick Leave)⁵⁵⁾などの休暇も与えられた。

前方の部隊に配属された看護婦は、到着後に陸軍病院の概要、浄水設備、野外調理法、記録の仕方などの訓練を受け、また傷病者が出た場合の救護所の種類と搬送ルートを教えられた。医師や歯科医師からは、迅速に生命危機の回避が求められる場面での判断と対応について講義を受けた。

一例であるが、インドのチベット付近で結成され、1943年に東南アジア指令部 (South East Asia Command) のもとで活動した第14英国陸軍病院は約1,000床規模であり、衛生要員の定員は約200名であった。衛生要員200名のうち看護将校 (後述) であるQA (QA/R, TANSを含む) の定員は80名であったが充足率はつねに低く、25-50名の不足を生じていた。ある時点の病院配属の看護将校総勢55名のうち、QAが4-5名、QA/Rが35名、TANSが15名の割合であった。そこから多いときは2/3以上の看護将校が、近隣のインド陸軍病院や傷病者後送所、さらに前線のポストに派遣されていた。

看護将校はほとんどが未婚であったが、既婚者も2-3名含まれていた。看護婦には毎月、現在の職場に満足しているかどうかと、満足していない場合にはどの施設への配置転換を希望するかが聴取された。移動は個人単位で頻回に行われた⁵⁶⁾。

看護補助者の役割の多くを植民地の人々が担っていた。

4) 地位と報酬

1926年にQAに階級が認められたものの、給与や待遇などの面において、通常の将校と同等の内容が保証されているわけではなかった。総監督 Katharine Jones はコミッションの将校、すなわち他の将校と同等の身分及び待遇となるのが、看護全体の地位向上につながるの考えのもとに熱心に活動を続け、1941年9月からは戦時中のみという条件のもと、陸軍だけでなくすべての軍でQA (QA/R, TANSを含む) がコミッションの将校となった。これによりQAは将校階級をもつ唯一の女性となり、この頃よりQAは看護将校 (Nursing Officer) と呼ばれるようになった。1943年1月からは政府によるQA個人の階級の認定が始まり、制服の変更と階級章の着用が義務づけられた。

空軍の参入によりQAの階級にも再編が必要となり、表2に示すように総監督の次に、新たに総主監督 (Chief-Principal-Matron) が設けられて、これまで大佐 (Colonel) であった総監督は准将 (Brigadier) になり、総主監督が大佐になった。これまでシスターとスタッフ看護婦は共に中尉 (Lieutenant) であったが、スタッフ看護婦の階級が廃止された。

1940年VAD看護要員のうちGrade Iに該当するものは、QA将校より下位ではあるが、QA将校と同等のファーストクラスの旅行や宿舎が認められた。しかしこれは混乱を引き起こしたために、1943年に中止され、VADの将校クラブの利用は不可能になった⁵⁷⁾。またVAD要望によって、彼女らに期待されていたRAMC男性補助員の仕事のうち、一部の重労働が免除された。このことによりVADは高度な医療技術の担い手となったQAの代わりになれず、さりとて男性補助者の代わりにもなれないという理由で、存在意義が問われるようになった⁵⁸⁾。結局、民間医療の危機とVADの階級問題により、男性将校からは反対意見も多かったが、QAは前線に送られた。

5) 制服

QAの制服は、1939年の時点ではグレーの制服

表2 QAIMNS の陸軍における階級—1941年の前後比較

	Before	After
Matron- in Chief	Colonel	Brigadier ⁵⁹⁾
Chief Principal Matron	—	Colonel
Principal Matron	Lieut. Colonel	Lieut. Colonel
Matron	Major	Major
Sister-in-Charge*	Captain	
Assistant Matron	Captain	
Sisters with 10 years' service	Captain	
Sister	Lieutenant	Lieutenant
Nursing staff	Lieutenant	—

* Charge pay が認められる Station に勤務するものとする

に赤のケープであった。いずれも最良の生地で作成され、ハロッズで購入することになっていたが、高額なため費用の半分は政府が補助していた。QA/R と TANS はグレーの制服に赤の縁取りがされているグレーのケープで、TANS のみ角に T の文字が付されていた。

1943年9月には、材料の高騰により、QA のグレーと赤の制服は平時のものと認定し、カーキの制服を導入し、階級を示すための肩章が付けられた⁶⁰⁾。場所を選ばず任務に適していたが、赤いケープは人気が高く、傷病者に大きな安心と信頼

を与えた。

VAD 看護要員は所属する組織の制服と記章を着用した。制服は白いシャツに青のギャバジンの3つボタンのチュニック、スカート、帽子、黒いネクタイで、看護衣はグレーの混じったライトブルーの木綿のドレスに白のエプロンとベール、エプロンには胸に大きく赤十字のマークがついていた。

6) 結婚

かつて QA は未婚か未亡人であることが条件であったため、結婚した場合は強制的に解任されたが、1941年戦争の長期化による人員不足を補うため、既婚者の登録や再登録を可能にして、妊娠した場合のみ解任することとした。実際、任務中に結婚するものも多かった。また、結婚した場合も、夫と妻が同一地域で勤務することはかまわないうが、同じ部隊に所属すること、また妻が夫のもとから通うことはできないことになっていた。

7) 除隊, 死亡

1945年から1948年の3月31日までに看護将校の任務解除が行われた。QA は1939-45年の戦争により236名が殉職した⁶¹⁾。その多くは敵対行為によるものであった。輸送中の船が敵の攻撃を受けて沈没するなどにより QA のメンバーが亡くなる事件が1942年に南アフリカに向かう途中の船で32名、1944年にも東アフリカからインドに向かう途中で44名が亡くなった。Sterns の著書に



写真1 第一次世界大戦における QA (右) と TFNS (左) の制服. The First World War Poetry Digital Archive, University of Oxford (www.oucs.ox.ac.uk/ww1lit)⁶⁾

よれば英国の看護要員全体の殉職者数は3,000名とあるが、その内訳は不明である⁶²⁾。

IV. 考 察

英国でも第二次世界大戦では看護の需要が高まり、多くの女性が看護要員として動員された。しかし英国陸軍看護にはその歴史的経緯から、いくつかの制度上の特徴があった。以下ではその制度上の特徴と戦争がもたらした影響について考察する。

1つは英国では当初より、軍の傷病者を看護するのはむしろ英国政府の責任であると考えた Nightingale が、ボランティアよりも軍看護婦の育成に情熱を傾けたため、軍看護婦はきわめて緩慢なペースでしか増加しなかったが、その代わりに質が高く保たれ、少数精鋭のエリートとなったこと、そして軍看護婦が、男性補助員やそれに代わるボランティアや民間看護要員の指導監督をするという指揮系統のもとに看護を提供したことである。

英軍の階級については、そもそも英国貴族社会の秩序を反映したものと会田の指摘がある。第二次世界大戦で自ら捕虜となった会田は、収容所で出会った英軍将兵について「とくに士官と下士官・兵との間には、これでも同じイギリス人かと思われるほどの差がある」と驚きつつも、そうした階級システムをもたない日本について「近代国家の中で日本だけが特殊」(会田, p.106) なのだと述べた。映画『戦場に架ける橋』でも、捕虜となり労働を強要された英国人将校が、拷問に苦しみながらも「将校は指揮をしても労働はしない」との意志を貫く場面がある。待遇面でも、看護将校とそれ以外の看護要員との間には移動、宿舎、食事などが区別されていた。

英国でも二度の大戦では、想像を超える規模での看護需要が生じた。その需要を満たすために、ボランティア組織を含む新たな関連職種が次々と創設され、その要望に応じて役割の変更が行われた。そして外地では植民地の人々の労働力が看護に利用された。このような職種や役割の複雑化は、看護に関連する職種相互の地位を脅かし、緊

張を生んだ。

戦争という非常時においては個人の権利や私生活がある程度、制限を受けた。英国でも看護婦は応召した以上、派遣日時や派遣先も知らされないままに派遣された。QA はさらに前線近くの危険な衛生施設にまで配置された。しかし派遣先では勤務場所に関する意見や希望が聴取され、看護婦はいくつかの衛生施設を移動し、個人で流動的に勤務した。私生活に関しても、任務中の男性との交際や結婚が可能で、結婚による任務解除も許されるなど、個人の権利が守られていた。

軍隊の階級システムや規律の厳しさが、看護の教育や実践にもちこまれた影響を、Sterns は Hutchinson の用いた軍隊化 (Militarization) という言葉を用いて説明する。彼女は、戦前の看護教育にはシスターによる重箱の隅をつつくようなあらゆる執拗な嫌がらせがあったことを例に挙げながら、英国では看護教育の伝統として、ほとんど強迫的と言ってよいような厳格さや狭量さが引き継がれたと指摘し、このような伝統はオーストラリアの看護婦には見られなかったことから、英国では軍病院における教育方法が、民間の看護婦養成機関で手本にされたからだと述べる⁶³⁾。民間病院の看護婦が軍病院に派遣されたときに感じた特徴——こまかな手続きや規則に拘泥し、疑問をもたずに権威に服従する——は戦時に求められる特質であっても、看護婦個々の自律性を損うという点では疑いようがないものであり、個々の患者への看護に影響するとともに、長い目で見ても専門職としての看護の発展に影響する。

英国では前線や国内の緊急病院に、軍、ボランティア、民間などさまざまなセクターから、ほとんどすべての有資格看護婦が動員され、そのことによって民間の病院が深刻な人手不足に陥った。そして教育を受ける権利をもつはずの看護婦生徒が、実習の名のもとに、病院の労働を担われた。日本でも同様の問題が生じており、なかでも精神病院やハンセン氏病療養所などがきわめて深刻な状況に陥った。しかし、政府による介入があった英国にくらべて、日本ではその実態が社会からはほとんど知られず、どこからも支援の手が届かな

かった悲惨な歴史がある。

第二次世界大戦では総動員のために、看護など戦時に必要とされる技術をもつ女性に対して、社会から特別な協力が要請され、こうした要請に応じることが個人として承認され、専門職の地位を高めるチャンスと考えるものがあった。

戦争や軍隊という組織による影響は看護を志す学生や新人ばかりではなく、巡り巡って看護ケアを受ける立場にある人々にも向かった。何が人々への看護をよいものとするかについて歴史に学び、自覚的でいたいと考える。

V. 結 論

本稿では、英国の陸軍看護制度と第二次世界大戦中の実際を明らかにすることを通じて、以下の視点に基づく知見を得た。

英国では戦傷病者の看護は政府が責任を負うべきとの考えのもとに、陸軍病院で看護婦の教育が行われ、軍看護婦が戦時における看護の中心を担った（責任の所在）。軍看護婦は陸軍病院における医療と衛生、傷病者の看護に関して権限をもち、補助者の指導監督が服務規程に明記されていた。また戦中のみではあるがコミッションの将校階級が認められ、高い地位と待遇を享受した（権限と地位）。

戦中の看護需要の増大に応じるため、義勇軍病院や民間病院の有資格看護婦が動員され、また補助者として英国赤十字社等の女性ボランティア、植民地の人々が動員された。職種や役割の複雑化したことで、相互の地位が脅かされ、緊張を生じた（組織と役割）。前線へは日時や場所を知らされないままに派遣された。しかし希望による勤務場所の変更、男性との交際、結婚による任務解除が許可されていた（職務上の制約と私的生活の自由）。

看護婦の動員により地方の民間病院、とりわけ精神病院やハンセン氏病療養所などが深刻な影響を受けた。動員された病院看護婦の代わりに、生徒が実習という名のもとに病院の労働を担った（看護婦の動員による市民への影響）。戦時の要請に応じることが個人として承認され、専門職の地

位を高めるチャンスと考えるものもいた（社会からの協力要請に対する看護婦の応答）。民間に軍隊の階級や規律の厳しさが広まり、人々に提供される看護の質や専門職の自律に影響した（軍看護が看護実践と教育に及ぼした影響）。

学校法人日本赤十字学園教育・研究及び奨学金基金（平成28・29年度）」により助成を受けた。

参考文献および注

- 1) 佐々木秀美. ナイチンゲール イギリス陸軍省を改革する：学習（経験）したことから学習せよ. 看護学統合研究 2011；13(1):29-48
- 2) Sterns P. Nurses at War; Women on the Frontline 1939-1945. Stroud, Gloucestershire: Sutton Pub.; 2000.
- 3) 川原由佳里. 第二次世界大戦における日本赤十字社の衛生支援. 日本医史学雑誌 2015；61(4):337-354ならびに川原由佳里. ビルマ敗退戦と赤十字の看護. 日本医史学雑誌 2015；61(4):355-372
- 4) 軍隊ではserviceは兵役、すなわち軍籍に編入されて、一定期間軍務に服することをいう。Army Nursing Serviceの訳語は陸軍看護役でもよいが、今回は陸軍看護サービスと訳した。
- 5) Crew FAE. The Army Medical Services: Administration Vol. 2. London: Her Majesty's Stationery Office; 1955.
- 6) Hay I. One Hundred Years of Army Nursing. London: Cassell & Company Limited; 1953.
- 7) Piggott J. Queen Alexandra's Royal Army Nursing Corps, Republished. London: Leo Cooper; 1990. p. 70-88.
- 8) Brayley MJ. World War II Allied Nursing Services. Northants: Osprey Publishing; 2002. p. 6-18.
- 9) Hallet CE. Nurse Writers of the Great War. Manchester: Manchester University Press; 2016. p. 187-210.
- 10) Summers A. Angels and Citizens, Revised ed. Berks: Threshold Press Ltd.; 2000.
- 11) 黒川章子. 1909年のイギリス赤十字社「ボランティア救助部隊 (Voluntary Aid Detachments: VAD)」の誕生. 立命館産業社会論集 2001；37(3):115-133ならびに黒川章子. 第一次世界大戦におけるイギリス赤十字・ボランティア救助部隊一部隊の軍隊化と女性メンバーの活動一. 立命館産業社会論集 2003；38(4):81-105
- 12) Crew FAE. 1955. p. 1.
- 13) Summers A. 2000. p. 56.
- 14) Tyrer N. Sisters in Arms. London: Phoenix; 2009. p. 2-5. ネットリーの王立ヴィクトリア病院は1856年着工, 1863年開設, Nightingaleは長い廊下に小部屋が並ぶネットリーの建築デザインに異を唱えたが, 意見が反映されず, 王立ハーバード病院はNightingaleの意向に沿っ

- てパビリオン形式で建築された。
- 15) 英国戦傷病者協会の女性委員会の代表はヴィクトリア女王第3王女クリスティアン。A. Summers. 2002によれば Miss Deeble が看護婦の社会階級を重視したのは下士官である男性補助者に命令したり、悪行を戒めたりするため威厳が必要と考えたから。
 - 16) Pakenham T. The Boer War. New York: Random House; 1979. p. 287.
 - 17) Crew FAE. 1955. p. 2. ボーア戦争の開戦時の看護要員は総勢88名。内訳はネトリーの Lady Superintendent 1名, Superintendent Sisters 19名, Sisters and Nurses 68名であった。最終的には1,400名以上が採用された。うち教育を受けていたものは800名であった。南アフリカには22の病院が設置され、看護婦は原則として前線の野戦病院には配置されず、兵站病院に各4名、港に近い基幹病院には最少から20名が配置され、1名につき60名の傷病者を担当した。
 - 18) Royal Red Cross. The Nursing Record 1989; 23: 305 ならびに Loyd AK. An Outline of the History of the British Red Cross Society; from its Foundation in 1870 to the Outbreak of the war in 1914. 1917. Imperial War Museum (以下 IWM とする) 所蔵
 - 19) アレクサンドラ・オブ・デンマーク (Alexandra of Denmark, 1844–1925) はイギリス国王エドワード7世の妃でイギリス王妃、インド皇后。王太子妃時代には戦争で亡くなった遺族の経済援助のため英国陸海空軍人家族協会を設立した、王妃時代は英国陸軍看護サービスにも貢献した。
 - 20) このうち看護総監督 (Matron-in-Chief) 1名は戦時局に、副監督 (Principal Matron) 2名のうち1名は戦時局、1名は南アフリカに配置され、QA全体の監督にあたった。
 - 21) The Queen and the Navy Nursing Service. The Nursing Record and Hospital World 1902; 28: 142 Piggott Jによれば男性補助者に下士官の階級が認められたため、看護婦はそれよりも上級の准士官の階級が認められた。記章は1905年に正式に登録された。
 - 22) Crew FAE. 1955. P. 6–8. 英国には23の国防義勇軍病院があり、1病院につき520床で、TFNSがそれぞれ121名配置されていた。TFNS登録時の年齢は23歳以上であること、認可された病院での3年間の実践経験が必要とされた。Standing Orders of the Territorial Force Nursing Service. His Majesty's Stationery Office. London: Harrison and Sons; 1912. ならびに Territorial Army Nursing Service. The British Journal of Nursing 1921; 67: 256 いずれも IWM 所蔵
 - 23) 黒川. 2001によれば、1870年に「英国救護協会 (British National Aid Society)」が創設された。その後、1899年に設立され「英国赤十字中央委員会 (Central British Red Cross Committee)」, 1904年に改称された「英国赤十字中央協議会 (Central British Red Cross Council)」と並立状態となったが、1905年「英国赤十字社 (British Red Cross Society)」へと合併再編された。赤十字社の総裁はアレクサンドラ王妃。VADは1984年には使命を終えた。
 - 24) Red Cross Work. The British Journal of Nursing 1919; 43: 256. ならびに A. K. Loyd. 1917. p. 32. 英国赤十字社のVADは日本赤十字社の救護班を参考に、医師、事務員などの他、看護婦取締2名と女性20名(うち2名は正規の訓練を受けた看護婦)で構成。列車、駅、駅近く設置される患者休養所、国内の軍病院での任務にあたらせるとあり、これについては日本の篤志看護婦人会が参照された。
 - 25) Hallet CE. 2016. p 187–210. ならびに The British Red Cross Society. Red Cross Voluntary Aid Detachment. 1916. IWM 所蔵. 資格を有する看護婦によって基本的な看護の知識の提供と技術の演習が行われた。試験はかならず実技形式でおこなうことが定められていた。
 - 26) 戦時局ではQAの年40ポンドを参考にVAD看護要員には年20ポンドの手当てを支払うことを決定。
 - 27) VADの指導者であったFurse Kは、VADの問題として、軍隊の規律の厳しさをシスターによるいじめと受け止める傾向があったと述べた。Furse K. British Red Cross Society 関係資料, IWM 所蔵。
 - 28) 1918年までの値。
 - 29) K. FurseはVADメンバーに赤十字の人道とともに、王と国家に対する忠誠を求めた。QARANC ホームページ, <http://www.qaranc.co.uk/voluntary-aid-detachment.php> 2018年7月17日アクセス J. Hutchinson. Champions of Charity: War and The Rise of The Red Cross. Boulder: Perseus; 1996.
 - 30) 各地区の国防義勇軍病院の主監督23名が出席、ほぼ全員が戦争で動員された経験があった。
 - 31) Sterns P. 2000. 第二次世界大戦中の Indian Nursing Service の看護婦66名が従軍。
 - 32) Abel-Smith B. A History of the Nursing Profession. London: Heinemann Educational Book Ltd.; 1960. p. 161–162.
 - 33) Crew FAE. 1955. p. 13.
 - 34) The War Office. Condition of Service in Queen Alexandra's Imperial Military Nursing Service. 1936. IWM 所蔵
 - 35) Nursing in the Army. Queen Alexandra's Imperial Military Nursing Service. London: His Majesty's Stationery Office. Harrison and Sons; 1938. British Library 所蔵
 - 36) Civil Nurse Reserve. The British Journal of Nursing 1940; 88: 170.
 - 37) Abel-Smith B. 1960. p. 162.
 - 38) Sterns P. 2000. p. 4–5
 - 39) Tyrer N. 2009. p. 17
 - 40) QARANC ホームページ, <http://www.qaranc.co.uk/>

- voluntary-aid-detachment.php 2018年7月17日アクセス
- 41) War Regulation for V.A.Ds. London: His Majesty's Stationery Office. Harrison and Sons; 1941. British Library 所蔵
- 42) 1938年に陸軍により設置される。ATSのほか、王立婦人海軍 (Women's Royal Naval Service, WRNS), 婦人補助空軍 (Women's Auxiliary Air Force, WAAF), 第一看護ヨーマンリー (FANY) などがあった。同じ女性の組織だったがQAはATSとは別組織だった。
- 43) Bendall ERD, Raybould E. A History of the General Nursing Council for England and Wales, 1919-1969. London: H.K. Lewis & Co Ltd.; 1969.
- 44) The British College of Nursing, Ltd. The British Journal of Nursing 1943; 91: 66.
- 45) Tyrer N. 2009. p. 21.
- 46) Nursing the Authorised manual of the St John Ambulance Association. Wilts: The Swindon Press; 1964. IWM 所蔵ならびに Sterns P. 2000. p. 17.
- 47) ATS Remembered ホームページより Aldershot で Sick Bay Orderly の任務を経験した Binns ME の証言。 <http://www.atsremembered.org.uk/binnsheetpdf.pdf> 2018年7月12日アクセス。店員や調理など、さまざまな任務を経験したが、AldershotでQAのSisterの指導のもとに看護補助者としての任務にあたったときが、本当の看護を行えて、最も充実していたと証言している。
- 48) Tyrer N. 2009. p. 19.
- 49) 最初はエジンバラ大学の臨床指導者養成コース。看護学部は1960年代に同大学に開設された。
- 50) Davis BL. The British Army in WW II: A Handbook on the Organisation, Armament, Equipment, Ranks, Uniform, etc. 1942. London: Greenhill Books; 1990. p. 63-67.
- 51) Brayley MJ. 2002. p. 6-18. QARANC ホームページ。
- 52) Sterns P. 2000. p. 4.
- 53) Brayley MJ. 2002. p. 6. 日本軍が条約で保護が規定されている衛生施設や人員をターゲットとしていたため、少しでも敵の攻撃を察知したら移動した。1日に3回移動した施設もあった。
- 54) Tyrer N. 2009. p. 19-20. 民間病院の看護婦予備役は同時期に召集されても同じ部隊になることはあまりなかった
- 55) War leave は今日の Military leave と同等のものと考えられる。 <https://www.navycs.com/uk/british-military-leave-benefits.html>
- 56) WO117/334, D.D.M.S. 14 Army, 英国公文書館所蔵
- 57) Abel-Smith B. 1960. p. 163.
- 58) Saunders H. The Red Cross and the White, A short history of the joint war organization of the British Red Cross Society and the Order of St. John of Jerusalem during the war 1939-1945. London: Tapp and Toothill Ltd.; 1949.
- 59) Roberts JI, Group TM. Feminism and Nursing: An Historical Perspective on Power, Status, and Political Activism in the Nursing Profession. Westport, CT: Praeger; 1995. によれば、米国陸軍看護部隊 Army Nurse Corps で Brigadier general の階級についた人は200年の間2人のみ。海軍や空軍も同様。性差別やハラスメントは続いており、ベトナム戦争ではそれが如実だったとある。
- 60) Queen Alexandra's Royal Army Nursing Corps Association. Sub Cruce Candida; A celebration of one hundred years of Army Nursing, 1902-2002. London: The Bath Press Ltd.; 2002.
- 61) Tyrer N. 2009. と Brayley MJ. 2002. によれば190名、うちQAが26名、QA/Rが134名、TANSが30名であった。
- 62) Sterns P. 2000. p. 4-12
- 63) Sterns P. 2000. 扉より

The British Army Nursing System and Its Influences during World War II: Focusing on Historical Perspectives on Wartime Nursing

Yukari KAWAHARA, R.N., P.H.N., PhD.

Japanese Red Cross College of Nursing

The purpose of this study is to clarify the British army nursing system and its influences during WWII, in order to get wide historical perspectives for the study of wartime nursing. Results show that the UK's Army Nursing Service started from a small number of nurses who were elites and who supervised male orderlies, based on Nightingale's idea that the British government had the responsibility for British wounded and sick in wartime. The empire's war and the two world wars increased the demands on nursing. Volunteers, such as those from the Red Cross nurses and colonial people from the outside of the UK, were introduced into the work force. For emergency hospitals for the wounded and for those injured by air raids, qualified nurses were mobilized from civil hospitals, and in their place nurse students took charge of hospital labor. A nurse who was contracted with the military could not make a request about the place of work, but was considered on the basis of opinions and hopes regarding duties at the hospital, and worked individually while moving in the hospital. Also, marriage was permitted, even during the mission. During the war, the ranks and positions of military nurses were increased to the same level as those of male officers, but on the other hand, the military class system and the severity of discipline had an influence on nursing education and practice.

Key words: World War II, Army Nursing Service, Queen Alexandra's Imperial Military Nursing Service, British Red Cross Society, Voluntary Aid Detachment